わが人生観

伊藤 整

大和出版

わが人生観
―わが人生観19―
昭和四十五年十月三十日　初版発行
昭和四十七年十二月五日　新装第一版発行

著者　伊藤整
発行者　大和たか
発行所　大和出版販売株式会社
営業所　東京都豊島区西池袋一～一〇～二
郵便番号　一七一
電話　東京九八三―六一六一
本社　東京都中野区松が丘二～三二
（乱丁・落丁のものは、お取替えいたします）

印刷・信毎書籍印刷　製本・美成社
© 1970 Sadako Ito.　Printed in Japan.
0395-000190-4452

わが人生観

伊藤 整

大和出版

昭和四十年夏　自宅にて　東京新聞提供

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

私は白く崩
れる凍の穂
を越えて漂
ってゐる捨児だ

伊藤整

目

次

人生について

人生には明日があるということ　13
人間生活と調和　19
死者と生者　31
青春について　47
体験と思想　56
革命と幸福　66
汚れなき人間の像　71

愛と性について

近代日本における「愛」の虚偽　91
我が恋愛作法　105
情緒と見栄のために失恋は苦しい　119
男と女の愛情　126

性の倫理と文学　138
我が文学生活
弟の死　149
他人と自分　154
常識と私　156
わが著作と思索を語る　159
小説家志望の女性に与う　163
評論家と読者　176
無関心な飲食者　182
私の五つの楽しみ　190
酒についての意見　204

解説　瀬沼茂樹　213
——人間性の認識者——
年譜　224

装幀　栃折久美子

わが人生観

伊藤　整

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

人生について

人生には明日があるということ

今日からはじまる私たちの未来の日は、一日か十年か五十年か分らないが、主観的に言って永遠なのである。……人生は短いとか、もう駄目だとか考えるのは、怠けもののすることである。……自分の幸福と平和とは、自分で作ろうと努力して見るだけの時間が、人生には常にある。

私たちがよりよく生きようとするのは、功利的な、快楽追求の法則によるものだ。それを、エゴイスティックなものとして、また利益追求的なものとして、冷笑することはできる。しかし冷笑することのできる人間は、生きることを放棄した人間か、でなければ、道徳的な安定感と物質や愛情の安定感を、必要な限度まで身につけている人間か、そのどちらかである。

生きることをあきらめた人間か、幸福を得てしまった人間でなければ、他人の幸福追求を笑うことはできないのである。仕方がないのだ。われわれはどうしても幸福の追求をやめることはできない。私たちが生きる上で一番必要なのは、衣食住と愛情であるように、普通には考えられているけれども、私は、それらのものよりも正義を求める気持の方が強いように思う。

貧しさや淋しさというものには、相当のところまで私たちは堪えられる。しかし自分の生きている場所に、正義を基とする秩序が保たれていない、と思うとき、私たちはそれを苦労に思い、生きることの意味を見失いがちになる。

それなのに一方では私たちは時々自分の幸福追求にあまりに性急になり、正義感とか社会通念というものを破ってまで自己の慾求を通そうと思う。それの現われが犯罪であり、また革命的行動である。犯罪と革命との区別は、一般に人間が考えているほどはっきりした区別のあるものではない。ある特定の人々の群の中で考え出されるところの、社会秩序に背いて何かの行為をし、別な生き方をしようとする企ては、失敗すれば犯罪だし、成功すれば革命である。産児制限運動というものすら、カトリックの立場からは罪に当るし、戦時中までの日本では犯罪であって、中絶をすることは罪人になることだった。

だから、少数の人々が、その方が合理的だと思うことが、その時の法律に反するとしても、それが常に悪である、という風には考えなくてもいいのである。

*

私は前にも書いたが、正義とか法とかは、臨時のものが多い。人を殺すなかれ、という永遠的な正義もある。それですら行なってよいと見なされている場合がある。戦争がそうであり、殺人者の死刑がそうであり、ベリヤやローゼンバアグすなわち秩序をくつがえそうとしたと見なされるものの死刑がそうである。いずれも私には不当の死のケースであるように感じられるけれども、権力と法を手にしている世界の大国の代表的機関が、いまこの種の殺人を公認しているのだ。

*

私は革命的行為や犯罪をすすめるためにこのようなことを書いているのではない。苦悩の中で

過ちを犯すかも知れない人に対して、自分を責めすぎなくてもいいことが人生にはいくつもある、と言ってあげたいだけのことである。自分が悪いことをしていると思いながらするところの犯罪が悪いことだということは、私も信じている。しかし、それと同時に、人間はみな生きてゆく権利があるということが考えられる。

悪いことをすることと生きてゆくこととの、どちらが大切かと言えば、生きてゆくことの方が大切である。ダタイやストライキも坐り込みも、かつては悪いことであった。しかし、人間が生きるために、どうしてもする必要のあることは、やがて善だと見なされる、というのが、文明社会の考え方の発展の方向であることを忘れてはならない。

*

社会が悪いことだと見なしているから、それをなした自分は悪人だと考え込みすぎて、自分を苦しめ、自分を否定しすぎることは、やがて自殺へとその人を追い込む。その時、人は弾力のある考え方をなすべきだ。

いままで述べたことは、対社会的に、ものごとを相対的に考えれば、また別な考え方があることを述べたのだが、人間の存在を空間的、時間的に見ても同じようなことが言える。

私は少年時代、二三の天文学の本を読んで、ひどく厭世的な気持になったことがある。地球がやがて滅びるものだし、それが滅びないうちにも地球が氷や熱に蔽われて人間は滅びると言われている。そんなものなら、生きていても何になるだろう。生きて何か仕事をしても、結局それは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.